

# どれみなのはなし

そのななてんご



もくじ

まえがき

ひとみ しゃしんき …………… 3

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

またやってみました。『そのはち』じゃなくて『ななてん』です。せつかくの卒業記念だということに

と、いうわけで、『ろくてん』同様に本編のみ、あとがきも言い訳もなしです。薄い本で申し訳ありませんが、わずかでもお楽しみいただけましたら幸いです。

いつも通り、恥ずかしい斬ですので、苦手な方はこのまま本を閉じたほうがよいと思いますけどね。

それでは『どれみはなし』そのななてん、卒業記念。どうぞご覧くださいませ。

イラストレーション………久遠一海

酒処 金井亭亭主

猫好敬白

3 ひとみ しゃしんき

ひとみ しゃしんき

\*\*\*\*\*

「ほな、おとうちゃん、おかあちゃん、  
またあとでな〜」

手えふりながら、ふたりがタクシーに乗り込む  
を見送って。あたしはようやくひとりでになった。  
手に持ってた卒業証書、さっきふりすぎたんで頭  
が出てしもてん。ぎゅつ、と押しこんで、と。

ふう。ずいぶん遅れてもうたな。これから八  
ナちゃんとミミたち見送りにMAHO堂行かなあか  
ん、うちゆうのに。

あゝあ、どれみちゃんたち、みんな先行ってしも  
たみたいや。

そう思いながら校門のところで歩いて行ったら、  
「あら？遅かったわね」

って声。

あれっ、と思て振り向いたら、背えの低い子がひ  
とり。Gパンにシャツ着て、ぼうしかぶって、サン  
グラスかけた

「おんぶちゃんやんか。そのかつこ 逃げてきた  
んか？」

「ふふ、まあね。卒業式は、みんな撮りたがるから。  
あいちゃんは どうして？」

サングラスをちょいとおデコに上げて、おんぶちゃ  
んがあたし見てる。まあ、普通はこんな遅くなら  
へんわな。

のぶちゃんやらクラスのみんなやらにつかまって、  
大変やったんけどなあ。最後やから握手、とか、囲  
まれて泣かれてとか

うちのクラスで遠くに行くくんはあたしだけやし、去  
年からアメリカ行く言うてたももちゃんと違って、あ  
たしが大阪行くちゆうんはあんま言うてへんかった  
から、しゃあないんやろけど。

「なんや色々泣かれてしもてなあ」

思い出して苦笑いしながらそれだけ言つたら、

「あいちゃん、もてもてだもんね」

おんぶちゃんも、くすくす笑てる　　なんや、見

てたんやないか。人が悪いなあ。

「まあええわ。みんな待つてるやろ、いつしよ行こか」

\*\*\*\*\*

「そつえば、大阪へはいつ行くの？」

学校前の坂をもうじき降りきる、つちゅう頃、お

んぶちゃんが言つた。

「あ、言うてへんかった？　来週の終わりや。もも

ちゃんがアメリカ行くんは、なんとか見送れるんや

けどなあ」

「そつか。もう、ほんとにお別れなんだね」

下向いてもうたおんぶちゃんの顔見ながら、あ

しは頭かいて、

「おんぶちゃんの引越しは手伝えへん。かんに  
んなあ」

引越しは月末や言つてたもんなあ。できたら行き  
たいんやけど

「飛行機で行くももちゃんは仕方ないけど、あいちゃ  
んまで来てくれないなんて」

ああ、顔を手えでつつんでしもた。そんなん言つ  
たかて　あん？　いま、ちよつと口もとふくらまし  
てん。こおらつそ泣きやな。

「おい　もう、おんぶちゃんまでMAHO堂に  
閉じこもつたりせんといてや？　あたしがファンか  
らボコボコにされてまうわ」

ほんほん、つと背中たたいて、げんこで軽くあた  
まコツンツ、てやつたら、おんぶちゃんが苦笑いし  
ながら舌だした。

「エへ　ごめん」

つたく　けど、ちよつと楽になつたわ。おおき  
に、おんぶちゃん。

「ね、ちよつと遠回りしてみない?」

あたしの前にまわってきたおんぶちゃんが、腰かがめて見上げてん。な〜んかたくらんでる気がするけど

「ん〜 どれみちゃんたち先行ってしもたみたいやし、まあええか」

「それじゃ、美空町一周ツアーー! コンダクターはわたし、瀬川おんぶです♡」

とたんに元気なチャイドル口調になってん。

そやな。MAHO堂行く前に、もうちょい元気ためとかんと。

\*\*\*\*\*

美空町の公園。あたしがこの町を、最初に見わたした鉄棒。すべり台。砂場のまわりに広い林と草むらでも、いまはあたしらがやない、小さな子供が遊んでる。

「いろいろ、あつたよね」

おんぶちゃんがそう言いながら、あたしの横を歩いてった。まっすぐ、草むらのほうに向かつてる。

「どこいくんや?」

早足で追いかけてったら、いきなり立ち止まっしてもた。

「うぶっ!」

あだだ 背中にぶつかってもうたやんか。ちいと文句言つたる思て顔上げたら、おんぶちゃんが、草むらの方指差してん。

「ここ、覚えてる?」

「ここ、公園のわきにある、ただの草むらやん。わけわからんでいと、おんぶちゃんが顔だけこっち向いた。」

「3年前、間違えメールで集まっちゃった人たちの心を変えようとしてたわたしを、あいちゃんが止めてくれたの」

ああ そういえば、そんなこともあつたわなあ。

「思い出した？」

わたしは、忘れないわ。あいちゃんが体をはって止めてくれたの。心を変えられる人たちじゃなくて、わたしのことを心配してくれたの」

いや、そう　　やったんかもしれへんけど、それ真顔で言われると

「あは♡ あいちゃん、顔まっ赤よ」

「体ごとこつち向いたおんぶちゃんが、あたし指差して笑ってん。」

「もう！ からかわんといて!!」

ぷいっ、と背中向けて、そのまま歩つとつたら、

「ごめん、ごめん。待ってよ♡」

笑いながら追いかけてくる気配感じながら、3年前のこと、今ごろになって思い出したわ。そや、公園の草むらかて、思い出あつたんや。

小さなハナちゃん乗ったベビーカー押して歩いた小道、バッドアイテムを探し回った商店街

この町で思い出のない場所なんて、ないんかも知れへんなあ

\*\*\*\*\*

「最初のお別れは、ハナちゃんと口口たちね」

商店街に入ったところ、おんぶちゃんがぼつん、と言った。あたしはそつち見ないでうなずいて、

「マジヨリカにララモヤ」

考えてると、ちよつと寂しなってしもた。

「あいちゃん。なに考えてるの?」

ん? おんぶちゃんの目が、小さく笑うてる。

そか。

「おんぶちゃんと、おんなじことや」

おんぶちゃんがこつち向いて、大きくうなずいてん。

「そつよね。わたしたちはこれから会えるけど、ハナちゃんたちとは、こんどいつ会えるのかな」

ああ、考えただけで寂しなるいつんに　　ふう。

「5年後かも、10年後かも知れへん。ひよつとしたら、生きてるうちにはもう会われへんかもな」

「そうね」

「はあ。口に出したら、もっと寂しくなってもた。なんか元気になること言いたいんやけど、のどまで出てきてすぐ引っ込んでまう。」

「なんとかせななあ、思いながら歩っていると、おんぶちゃんが立ち止まった。」

「ねえ、ちよつとそこ、行ってみない?」

「そこ、て ああ、よく寄り道したコンビニヤ。そやけど、」

「ちよ、ちよい待ちや。いっくらなんでも、買い食いまでしとつたら、どれみちゃん怒んで!」

「それでなくても、どれみちゃん、食べものの匂いに敏感なんやから」

「そうじゃないわ。いいから、ね♡」

\*\*\*\*\*

「コンビニに入って、ひとまわりして、なんも買わずにそのまま出て。それでも、おんぶちゃんはコンビニながめてた。」

「どないしてん?」

「あたしが声かけると、顔だけちよつとこっち見て、」

「ね、わたしのママがアイドルだったころ、覚えてる?」

「おんぶちゃんのおかあちゃん? ああ、思い出したわ。」

「20年前に行ったときのことやな?」

「おんぶちゃんがうんうん、てうなずいて、」

「みんな違ってたよね。電話は押さないで回してたし」

「そやったなあ。なんや、映画のセットん中入ったみたいやった。」

「ポストも、なんや丸っこかったしなあ」

「そう。このコンビニも、酒屋さんだった

いま見てるものも、何年かしたら変わったちゃうのね」

おんぶちゃんは、まっすぐコンビニ見つめてる。サングラスで目がわからへんけど。

「せや。あたしも、大阪行きたびそう思うわ。4年前いたところが、どんどん変わっていくねん」

「そう。そうね」

はず向かいの郵便局や、奥のCDショップを見まわしながら、おんぶちゃんの言葉が、涙声になってん。

「あたしな、さつきからずっと、ハナちゃんとはもう会えへん、て考えてた。他のみんなには会えるけど、ハナちゃんやミミには てな」

せや。いま、はつきりわかったわ。魔女界に帰ってまうみんなとお別れは、耐えられるんかわからへん。それが怖かったんや。

最後の最後で、ちゃんとお別れできるかわからへん。そやから、おんぶちゃんと一緒に遠回りして、ちよっとでも先のばししてるんや。そやけど

「そやけど、ちゃうねん。ハナちゃんたちだけやない。あたしらがいま見てるもん、このコンビニも、小学校も、目の前にいるおんぶちゃんかて同じや。いまのみんな、もう会えへんものなんや」

おんぶちゃんのサングラスに、涙がたまってる。あたしは、コンビニのわきの階段まで、おんぶちゃん引つ張ってた。

「あいちゃんは、泣かれるばっかりね」

涙声のまま見上げるおんぶちゃんに、あたしはうなずいてた。

「ああ、あたしは泣かへん」

あたしの声、おかしなってるん。ほおがこわばってるのわかるわ。

「な、おんぶちゃん」

「うん？」

すうつ、て息吸うとると、鼻のあたりがなんや水っぽくなってるん。まだや。まだ早い。

「これからいっぱいお別れせなあかんやろ？」



「うん」

目の奥が、熱うなってきた。しっかりせな。

「それにいちいち泣いとなら、みんなたまらんわ。そやから、あたしは決めた」

「なにを？」

口が震えてきてん。もう、ちよつとだけ！

「これからみんな見送つても、見送られても、絶対泣かへん。笑つてお別れや」

「」

「せやから、せやから 今だけ、な？」

「うん」

うなずいてるおんぶちゃんの顔を見たとなん、あたしは首つたまに抱きついてた。

もう涙が止まらへん。泣き声も止まらへん。ただぎゅつて抱きしめて、肩ぬらすしかあらへん。

「わたしも、いい？」

「ん。あつたりまえ やんか」

おなががぎゅつ、としまつて、肩のあたりが熱う

なつてく。あたしは、この熱いもん忘れたない。

いんや、忘れへん。絶対 !

\*\*\*\*\*

小ちゃい公園で顔あらつて、あたしらはまた歩つてた。

ようやつとMAHO堂の坂が見えてきて、さあ行こかつちゆうとき、あたしの肩がぎゅつとつかまれてん。なんや？ 思てたら、目の前におんぶちゃんが回つてきとつた。

「なにしとんねや？」

「ふふ。こうして、ね」

顔近づけて、じつとあたし見てん。なんや、恥ずかしなつてきたわ。そしたら、いきなり目をぎゅつ、て閉じて、また開いた。

「ほら、おぼえた」

なんや？

「何年か、何十年かたつてから、またこつするの」

「何年か 何十年か ?」

おんぶちゃんの言葉、くりかえして見る。なんや、ようわからへん。

「そ、お姉さんになつたあいちゃん。お母さんになつたあいちゃん。おばあちゃんになつたあいちゃん。みんな、みんなおぼえておくの。そしたらいつでも、いまに会えるわ」

お姉ちゃん、お母ちゃん、おばあちゃんになつたおんぶちゃん、かあ

「そやな。あたしもやつてみよ」

今度はあたしが、おんぶちゃんの顔に近づいて

「ほいで、ぎゅっ」と

ちゅ♡

「!?」

びつくりして目え開けたら、おんぶちゃんが笑うてた。

「この方が、はつきりおぼえられるでしょ?」

やっぱ、おんぶちゃんにはかなんなあ。もう、笑うしかあれへん。これなら、元氣に見送れそうや。

「お姉さんになつても、お母さんになつても、おばあちゃんになつても、またおぼえよ。ね?」

せやけど、おんぶちゃんの顔見てたら、もちよつと元氣欲しなつてきたわ。

「おんぶちゃん、いま、もつかいおぼえたつて」

「うん」

\*\*\*\*\*

「マジヨリカの言うこと、よく聞いてね」

MAHO堂の奥、魔女界の扉の前。ハナちゃんたちの見送りに、あたしらもなんとか間に合つた。

おんぶちゃんが着替える間、みんなに囲まれてぶつくさ言われたけど、まあええわ。

「あ、それから! おやつのまえにはちゃんと手を

洗って  
「

あたしは、どれみちゃんの肩にぼんっ、て手えか  
けて、言葉とめたった。

「そろそろ、行くぞ」

マジヨリカの声も、いつもより固なってる。

「ハナちゃん、早く立派な女王様になって、ぜったい会いに来るからね！」

さよならは、言わないよ」

ハナちゃん、もうじゅうぶん立派やで。そう心ん中  
で言いながら、おんぶちゃんと目を合わせてうな  
ずいた。

おんぶちゃんの右手が、あたしの左手と重なってる。

「それじゃあのお」

マジヨリカの声に、ハナちゃんがついてく。その瞬  
間、左手を調子に合わせて軽く握って、せえ、の

ぎゅっ！

ひとみの奥に、大きなハナちゃんが写った。

「ハナちゃん！」

少しだけ、時間をかけてから目え開いたら、ハナ  
ちゃんが小さくなっていく。

「いままで いっぱいいっぱい、ありがとう」

もいちど、ぎゅっ！

もう忘れへん。いつかもし会えたら、またこうやっ  
て写すんや。お姉ちゃんになったハナちゃん、いつ  
か、きつと。

わきを見たら、おんぶちゃんがこっち向いてうな  
ずいとった。泣きそうになりながら、それでも笑っ  
てた。

あたしも笑って、目えつむった。この顔も写しく  
んや、ひとみに。

ぎゅっ、♡

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付